

として鱈寿司を製造する企業であることがわかった。

旅行時に買う駅弁として食べられてきた鱈寿司だったが、元々の鱈寿司の製法を活かした機械の導入によって大量生産が可能になり、駅弁「ますのすし」の広域化が進んだ。遠距離輸送にかかる費用の問題をどう処理しているかに関しては、大量輸送の経済によって、またはコンビニの共同配送システムを利用することによって輸送費を削減していると考えられる。そして、ローカルな存在であるはずの駅弁が土地から離れても売れているのは、駅弁が作り出したブランドイメージを各企業がそれぞれに利用して鱈寿司を売っているからであるということがわかった。

美濃焼からみる産業観光と まちづくり

岡田 彩伸

近年、人々の生活、需要や社会、経済の変化によって旅行の形態も変わってきた。大衆から個人へ、国内から海外へ、といった具合である。そんな中で、旅行者の日々変化、多様化するニーズに対応するべく生まれたのが新しい観光である。筆者はその中でも特に産業観光に着目した。従来の観光地ではない地域に存在する新たな観光資源というものに興味を持ったからである。

産業観光とは、歴史的・文化的価値のある産業文化財（産業遺産）や生産現場〈工場・工房・農漁場〉及び産業製品、コンテンツなどのソフト資源を観光資源とする新しい観光形態であり、それらの価値や意味、面白さにふれることにより、人的交流を促進するものである。本論文では産業観光が旅行者、地域、産業の担い手に与える影響、また地域活性化にどう関わっているのか、産業観光とは何なのかを伝統産業、美濃焼を観光資源と

する岐阜県の東濃西部地方、その中でも特に多治見市をフィールドに考察した。

調査を進めるうちに、産業観光はターゲットを狭い範囲に限定する性質を持った観光であることが分かってきた。産業観光は点であり、いかに人や地域という線で点と点をつないでいくか、ということである。また、観光資源が現在も“生きている”産業である場合、観光客の受け入れ方などにも制限が出てきてしまう。旅行者にとって産業観光とはこれから当たり前になっていく観光の形態であり、地域・自治体にとっては集客資源として今後の期待できるものである。しかし産業の担い手にとって、産業観光は産業そのものであり、生活に直結するものである。美濃焼のような伝統産業ほどその問題は切実なものだろう。そういった意味で不況の続く今、産業観光の未来は、いかに産業を守っていくかにかかっているのではないか。

過疎地域自治体による移住誘致：

茨城県大子町を事例に

小澤 知美

団塊世代が次々と定年を迎える今、定年後の過ごし方の一つとして田舎暮らしがブームとなっている。なお、田舎暮らしと一言で言ってもその形態は様々であり、空き家を購入して地元に移住して生活するものから、ログハウスや別荘を利用する二地域居住を楽しむもの、気軽に田舎暮らしを体験できる農家民宿やクラインガルテンのようなものまである。また、民間の不動産会社が田舎暮らし向け物件を扱う一方で、過疎化や財源に悩む多くの地方自治体が田舎暮らしを希望する人向けに空き家バンクや移住優遇制度などの方法で、様々な移住誘致を行っている。

本稿ではこのように多種多様な田舎暮らしの中で、上記のように過疎化に悩む自治体のおこなう移住誘致に着目し、どのような要因で過疎地に移住者が集まるのか、また、定住するにはどのような条件が必要なのかを、過疎化が進むなか 20 年間無料で町有地を貸し出すという山田ふるさと農園事業を行う茨城県大子町をフィールドに移住者からの視点を元に考察した。

農園に移住した 5 組の家庭にヒアリングを行ったところ、当農園に移住を決めた理由はその土地に何かしらの縁がある、または全く知らない土地だが自然環境や食べ物などが気に入ったからという 2 つに分かれた。なお、土地の条件が悪い場合でも、優遇制度や効果的な広告によって十分人が集まることが分かった。また、定住に必要な要点として、地元コミュニティが移住者を受け入れてくれること、移住する際にある程度の不便さや困難は覚悟することが挙げられた。話から浮かび上がった要点として、移住者に必要なのは地元コミュニティへの溶け込みだけでなく、移住者同士のコミュニティを形成することであることが分かった。現在は特に大きな問題は起きていないが、今後、移住者が高齢化した際には、町営バスの巡回など交通の便を改善することが必要になると思われる。

ドイツにおけるヤノツシュの 作品世界の発信と再発信： キャラクター商品の孕む両義性

小林 夏美

ヤノツシュはドイツで非常に有名な子どもの本作家である。彼は多くの作品で絵と文どちらも手がけているが、その作品はキャラクター商品としても非常に広まりをみせている。本稿は、ドイツ

におけるヤノツシュの作品世界の発信と再発信という現象の一部を明らかにし、その考察を行うものである。

ヤノツシュが子どもの本として発信している作品世界には、ディートリヒ（1992）によれば、現実世界の解釈としての第一の世界と「魔法のしるし」によって示される第二の世界、第一の世界から第二の世界へと離脱する「奇人」たちが描かれている。第一の世界として描かれるのは、小さき者と大きな者との間の根源的対立が自然法則という覆し得ないものとして存在し、また多くの者が誤った幸福像を追い求めて真の幸福に気づいていない世界である。それに対し第二の世界は、「魔法のしるし」に満ちたより「真の」世界として描かれる。その世界においては、人々は自身の内に静けさを見出し、自然や宇宙と自我との一致をみることができるのである。第二の世界に到達するためには第一の世界という社会を「降りる」ことが必要であり、それを実行した者が「奇人」たちである。ディートリヒ（1992）は「奇人」たちの目指すものとしてヤノツシュが描く最終目的を、第二の世界へ到達し自然や宇宙との一致をみることでありと捉えるが、「奇人」たちの示す姿はそれに止まるものではない。「奇人」たちは社会から一度「降り」て第二の世界に到達した上で、第一の世界とのかかわりを模索する、両者のあわいを生きる存在として描かれているのである。

ヤノツシュは作品世界を段階的に捉え、個々の作品を個々の段階へ向けたものとして描いている。ほぼパナマ・シリーズの段階のみを「ヤノツシュ」として再発信するキャラクター商品はヤノツシュの作品世界を一部に限定している。しかし同時に、本に親しみのない子どもたちにも作品世界をひらくというはたらきも担っている。ここに、キャラクター商品の孕む両義性をみることができる。